【7】特定の時期を示さないが順序の前後を示す記事

［1］原始仏教聖典には、５０００を上回る固有名詞が登場する。この中には舎利弗やマハーパジャーパティーといった有名な人物や祇園精舎などのよく知られた寺院などのほか、ほとんど我々の記憶に残っていないような人物や地名も含まれる。もちろんこのほかにも固有名詞をもたない文字通り無名の人物、地名もしばしば登場する。

しかしそれらにもそれぞれの歴史があることはいうまでもなく、もしその人物が比丘であれば、少なくとも何人かを両親として誕生し、何人かを和尚として出家して、様々な履歴を残して死んでいったはずである。「死」が「出家」に先立ち、「出家」が「誕生」に先立つということはない。あるいはこの比丘に「沙弥」の時代があれば、「沙弥」は「比丘」に先立ち、この比丘に在家時代があったとすれば、それは普通に考えれば「沙弥」に先立つはずである。あるいはこの人物に子供があれば、「沙弥」として出家する前に結婚して妻を持っていたということを推測することが許されるであろう。

このように人にはごく特殊なケースを除けば、時系列にしたがって並べることのできる事項があって、これを「ライフサイクル」と呼ぶとすれば、これによってこの人物が登場する資料をこのライフサイクルにしたがって配列することができる。もちろんその他さまざまなエピソードがありうるが、それらも多くはこのライフサイクルのどの時点に属するかくらいは想像することができる。

そしてもちろん彼らには網の目のように張り巡らされた人間関係があったに相違ない。１つの聖典にはそのほんの１コマが書き残されているのであって、だからこれら人物が登場する１つ１つの聖典を集めて、その上でそれぞれの「各伝」を作り、それらを相互に関連づけてやれば、そのまま「釈尊伝」や「釈尊教団形成史」の再編成に資することになる。

［2］例えばその中の１人として「リッチャヴィ人の善星（Sunakkhatta Licchaviputta）」なる人物を取り上げてみよう。この人物は我々のデータによると原始聖典の５ヶ所に登場する。時系列にして早いと考えられるものから順に紹介すると次のようになる。

［2－1］“MN.”105‘Sunakkhatta-s.’（善星経　vol.Ⅱ　p.252）では、世尊がヴェーサーリの大林、重閣講堂におられたときのこととして、次のように言う。

衆多の比丘が世尊の前で悟ったところを述べ、「生すでに尽き、梵行すでに立ち、所作すでに辨じ、再びこの生に戻らないと知る」と語った。リッチャヴィ人の善星はこれを聞いて、正しく悟ったところを述べたのか、増上慢で述べたのかと世尊に質問し、世尊はある比丘は正しく悟ったところを述べ、ある比丘は増上慢で述べたのであるといわれ、ある人は五種の欲に心を傾けており、ある人は不動に、ある人は無所有処に、ある人は非想非非想処に、ある人は正涅槃に心を傾けている、……と説かれ、善星は歓喜して信受した、とされている。

ここでは善星は‘Sunakkhatto Licchaviputto’とされているだけで、比丘であったか優婆塞であったかは分らない。しかし釈尊の前で比丘たちの境涯を語るのを聞くことができる立場であったことを考えると、この経はすでに出家して比丘であるというイメージであったと考えて間違いあるまい。

［2－2］“DN.”006‘Mahāli-s.’（摩訶梨経　vol.Ⅲ　p.001）も、世尊がヴェーサーリ

の大林、重閣講堂におられたときのこととして、次のように言う。

その時、コーサラ國とマガダ國より、多数の婆羅門がある用件にて派遣せられ、ヴェーサーリに集まっていた。彼らは釈尊の名声を訊いて、会いに来たが、そのときリッチャヴィ人のオッタッダ（Oṭṭhaddha）＝摩訶梨（Mahāli）も釈尊と会って、リッチャヴィ人の善星が２，３日前（purimāni divasāni purimatarāni）に自分のところにやって来て、自分は世尊の元に住してからまだ３年にすぎないが（yad agge ahaṃ mahāli bhagavantaṃ upanissāya viharissāmi na ciraṃ tīṇi vassāni）、天の色形を見ることができるようになったが、まだ天の音声を聞くことができないと語った、と知らせた。釈尊はそれはそのような修行をしていないからだと語り、本当はそれ以上の四果を得るために修行するのだと説法され、かつてコーサンビーのマンディッサ遊行者（Maṇdissa paribbājaka）とダールパッティカ（木鉢を持つ者）の弟子であるジャーリヤ（Jāliya dārupattika-antevāsin）と、命と身は一なりや異なりやという問答をした、と話された、とされている。

ここでも善星は‘Sunakkhatto Licchaviputto’とされているだけであるが、比丘として３年間釈尊の元で過ごしたとしている。

なおここには他に、釈尊の侍者としてのナーギタ尊者（āyasmā Nāgita　迦葉＝Kassapa とも呼ばれている）と新学沙弥のシーハ（Sīha samaṇuddesa）が登場する。

［2－3］“DN.”024‘Pāṭika-s.’（波梨経　vol. I　p.150）には、相応漢訳があり『長阿含』015「阿嵬夷経」（大正02　p.066上）である。この経の舞台はマッラ国（Malla　冥寧国）のアヌピヤ（Anupiya　阿嵬夷）で、釈尊が乞食にはまだ時間が早かったので、遊行者バッガヴァ・ゴッタ（Bhaggava gotta paribbājaka、漢訳は房伽婆梵志）を訪ねられた時のこととされている。

その時、バッガヴァ・ゴッタは「２，３日前に（purimāni divasāni purimatarāni）リッチャヴィ人の善星（漢訳では善宿）が自分を訪ねてきて、自分は仏を捨てて去り、今はそのもとには住していない（paccakkhāto dāni mayā bhagavā. na dānāhaṃ bhagavantaṃ uddissa viharāmi）といっていたが本当か」と質問した。それは真実だと答えられ、以前はヴァッジ国において仏を讃歎したのに、仏が神通力を示さないのに不満を覚えて離れていった。実は、かつて犬のごとき生活をしていた裸行外道のコーラカッティヤ（acela Korakkha ttiya、漢訳は尼乾子・究羅帝）が７日後に死ぬことを予言して的中したこと、７種の誓戒（satta vatta-padāni）を守っていた裸行外道のカンダラマスカ（acela Kandaramasuka、漢訳は尼乾子・伽羅楼）の死ぬことを予言して的中したこと、裸行外道のパーティカ（acela Pāṭikaputta、漢訳は波梨子）が大言壮語していたにも拘らず釈尊に会いに来れなかったことなど神通を示したに拘らず、それを知ることができないで、とされている。漢訳もほぼ同内容である。

したがってここでは善星（Sunakkhatta Licchaviputta）はごく最近に釈尊のもとを離れたことになる。

なおこの経には他に、過去の裸行外道のパーティカのエピソードのところで、パーリにはダールパッティカの弟子のジャーリヤ（Jāliya Dārupattika-antevāsin）が登場し、漢訳には梵志・遮羅が登場する。

［2－4］“MN.”012‘Mahāsīhanāda-s.’（師子吼大経　vol. I　p.068）はヴェーサーリ

の近郊の１叢林が舞台である。

そのときリッチャヴィ人の善星（Sunakkhatta Licchaviputta）は仏の法・律を捨てて間もないころで（acirapakkanto hoti imasmā dhammavinayā）、「沙門ゴータマには人法を越えた勝れた最上智見はない（natthi samaṇassa Gotamassa uttariṃ manussadhammā alamariyañāṇadassanaviseso）」と触れ回っていた。舎利弗がこれを聞いて報告した。釈尊は舎利弗に対して、誹謗しようとしてかえって如来を称賛しているのだと説かれ、神通力、十力、四無所畏、八会、四生、五趣、四支具足の梵行を説かれ、今自分は８０歳になって、年老いたけれども、四声聞は１００歳を寿命として生き、智慧弁才には変りがないと説かれた、とされている。

前項では善星が仏教を捨てるという場面であったが、ここでは仏教を捨てて久しからざるときとなっている。そして唐突であるが、釈尊が「私は今や年老い、老衰し、齢を重ね、高齢となって、人生の到達点に達して、８０歳になった（ahaṃ kho pana etarahi jiṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto, asītiko me vayo yatati）」とされている。すなわちこれは善星が仏教を捨てて間もないころのことであるが、それは釈尊の８０歳の時であったということになる。

なおここには、他にナーガサマーラという比丘（āyasmant Nāgasamāla）が世尊の背後に立って、世尊を扇いでいたという。

［2－5］以上のように善星が登場する原始経典は５つあって、これを時系列に従って表にしてみると次のようになる。すなわち経典の編集者はこれらの経典のシチュエーションとしてはこの順序を想定していたということになる。

経名	説処	善星の時系列	他の登場人物
MN.105	ヴェーサーリの重閣講堂	仏教に帰して間もないころ	
DN.006	ヴェーサーリの重閣講堂	仏教に帰して３年	釈尊の侍者ナーギタ尊者 新学沙弥のシーハ （過去の話として） マンディッサ遊行者 ジャーリヤ
DN.024 長阿含015	マッラ国のアヌピヤ	仏教を捨てた直後	（過去の話として） 裸行外道のコーラカッティヤ 裸行外道のカンダラマスカ 裸行外道のパーティカ ジャーリヤ（漢訳では梵志遮羅）
MN.012	ヴェーサーリの１叢林	仏教を捨てて間もないころ	比丘ナーガサマーラ

［3］善星にもさまざまな人間関係があったはずであるが、ちなみに“DN.”006‘Mahāli-s.’の中に登場する「釈尊の侍者・ナーギタ尊者」は以下の経典にも登場する。

①雑阿含1250（大正02　p.343中）；世尊が一奢能伽羅聚落（Icchānaṅgala）におられたときのこと、住民たちが釈尊に供養したいと騒がしかったので、旧住の那提迦がそれを受けられるようにと勧めたのに対して、欲を離れるべきことを説かれた。

②雑阿含1251（大正02　p.344上）；前経の続きで、空閑処を楽しむべきことを説かれた。

③AN.005－030（vol.Ⅲ p.030）；世尊がイッチャーナンガラにおられたときのこと、住民たちが釈尊に供養したいと騒がしかったので、侍者のナーギタ（Nāgita）がそれを受けられるようにと勧めたのに対して、欲を離れるべきことを説かれた。

④AN.006－042（vol.Ⅲ p.341）；世尊がイッチャーナンガラにおられたときのこと、住民たちが釈尊に供養したいと騒がしかったので、侍者のナーギタがそれを受けられるようにと勧めたのに対して、林中に住するを楽しむべきことを説かれた。

⑤AN.008－086（vol.Ⅳ p.340）；世尊がイッチャーナンガラにおられたときのこと、住民たちが釈尊に供養したいと騒がしかったので、侍者のナーギタがそれを受けられるようにと勧めたのに対して、阿練若処を楽しむべきことを説かれた。

⑥‘Theragāthā’v.086；外道の説く道は仏道のように安らぎに導かないという内容の偈。

一読すれば分るように⑥を除けば、他の経はみな関連経である。またパーリ聖典ではナーギタは釈尊の侍者とされている。このようにナーギタが釈尊の侍者であったとすると、それは阿難が侍者になる前のこととなり、“MN.”105‘Sunakkhatta-s.’や“DN.”006‘Mahāli-s.’は釈尊成道２０年以前を時代背景にしていることになる。もし“MN.”012‘Mahāsīhanāda-s.’が釈尊の入滅直前のことであるとすると、成道４５年の直前ということになるから、善星が仏教から退転するまでに２０年余も経過していたことになる。

ともかくこのように１つ１つの固有名詞にはそれなりの歴史があり、そのそれぞれはさまざまな人間関係や、因縁を持っているから、その関係や因縁を丹念にたどっていくと、釈尊の生涯や釈尊を取り巻く人々の生涯のイメージが明らかになってくることが期待できるわけである。

［4］原始仏教聖典としては以上の通りであるが、実はその後の第２次的文献にも善星（スナッカッタ）は登場し、それらは善星を釈尊の侍者であったとする。（赤沼智善著『印度仏教固有名詞辞典』に負うところが大きい）

①スナッカッタは仏の侍者（satthu upaṭṭhāka）であったが、コーラ・クシャトリヤ（Korakkhattiya）の説くところを信じるようになって仏教を捨てて、仏を誹謗した。“Jātaka”094‘Jomahaṃsa-j.’（vol. I p.389）

②世尊が成道されてから２０年間（vīsativassāni）は一定した侍者（upaṭṭhāka）がなかった。そこでナーガサマーラ（Nāgasamāla）、ナーギタ（Nāgita）、ウパヴァーナ（Upavāṇa）、スナッカッタ（Sunakkhatta）、チュンダ（Cunda）、サーガラ（Sāgala）、メーギヤ（Meghiya）が勤めた。“Jātaka”456‘Juṇha-j.’（vol.Ⅳ p.095）、“Paramattha-dīpanī”（vol.Ⅲ p.111　ここではSāgalaをSāgataとする）

③「爾時有八人在辺捉払払仏。一者迦葉、二者優陀夷、三者渉伽陀、四者彌卑喩、五者那迦婆羅、六者均陀、七者修那刹邏、八者阿難」とする。侍者の名を列記したものであろう。『毘尼母経』巻５（大正24　p.827下）

④「仏姑子名須那察多、随侍仏八年」「仏言、本侍仏者字彌喜、次字須那察多、次字阿

難」とし、侍者として８年勤めたという。『処処経』（大正17　p.526上）

⑤「侍者羅陀、彌喜迦、須那利羅多、那伽娑婆羅、阿難等常侍従世尊執持応器」という。『大智度論』巻26（大正25　p.252下）

⑥「出家六年苦行時五人給侍、得道時彌喜、羅陀、須那利羅多、阿難、密跡力士等是名内眷属」という。出家する前の内眷属を瞿毘耶耶輸陀等諸婇女とし、大眷属を舎利弗・目連・摩訶迦葉などとする。内眷属は侍者をイメージしたものであろう。『大智度論』巻33（大正25　p.303中）

これらには善星は阿難が侍者になる前に比丘となり、釈尊の侍者をも勤めていたというイメージが付加されている。“DN.”006‘Mahāli-s.’にナーギタは「釈尊のもとに住してまだ３年」と記述されているのと関連するのであろう。またこれらにもナーギタ（迦葉）が登場するのも興味深い。